



アーツカウンシルしずおか
ARTS COUNCIL SHIZUOKA

相談窓口のご案内

アーツカウンシルしずおかでは、アートプロジェクトの主催者、アーティストや文化拠点の運営者、舞台に関わる方、アーティストとのネットワークを構築したい企業の方、アマチュアとして活動している方など、県内を中心に文化芸術活動を軸として活動を行う方をサポートする「無料相談窓口」を開設しています。

詳細・ご予約はこちらから



アーツカウンシルしずおか
ARTS COUNCIL SHIZUOKA
(公益財団法人静岡県文化財団内)

〒422-8019 静岡市駿河区東静岡二丁目3番1号 グランシップ1F

☎ 054-204-0059 ☎ 054-288-8180

✉ info@artscouncil-shizuoka.jp

🌐 https://artscouncil-shizuoka.jp

f 📷 X @artshizuoka

Website





視点をかえる 発想をひらく

アーツカウンシルしずおかは、「視点をかえる 発想をひらく」をキャッチフレーズに、住民主体のアートプロジェクトの支援を中心として、物事の見方に変化を促し、発想を広げるお手伝いをする組織です。

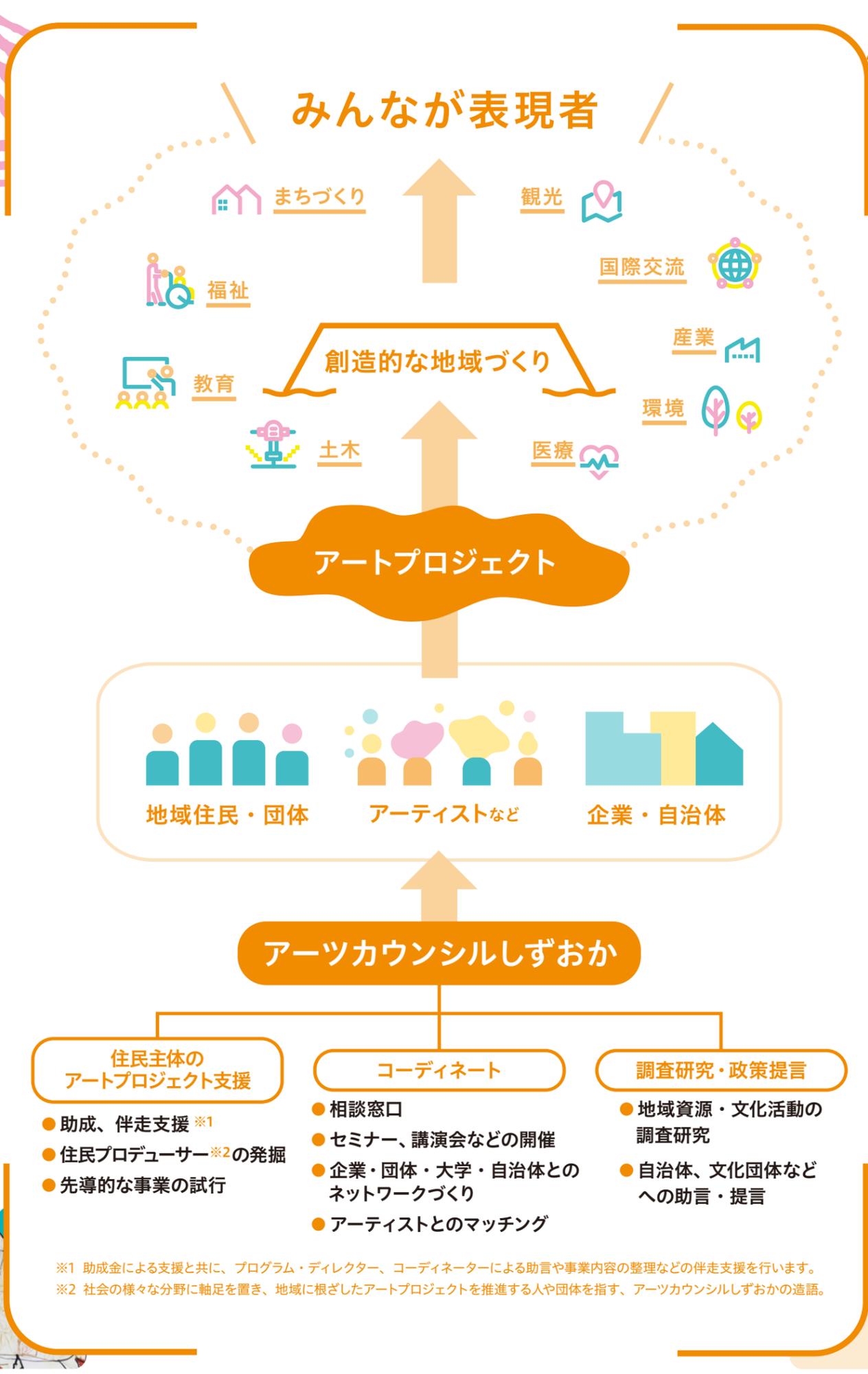
みんなが表現者となることを目指して、誰もが持っている創造力が活かされる道をひらき、まちづくりや観光、福祉、教育など社会の様々な分野においてイノベーションが生まれる、創造的な地域づくりに貢献します。

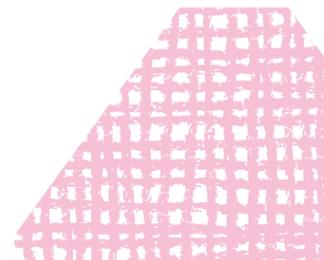
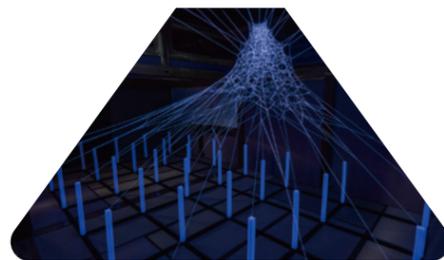
アートプロジェクトとは？

みんなでわいわいガヤガヤ、
あーでもないこーでもないと進める未来づくりです。

アートプロジェクトとは、地域社会において、人々が共同で社会の様々な事象と関わり展開される文化芸術活動です。多様な人々による協働のプロセスを重視し、その成果が地域や社会に還元される研究開発のように、いろいろな分野とアートが連携して取り組みます。

中でも、アーツカウンシルしずおかが進捗するのは住民主体のアートプロジェクトです。地域課題への対応や地域資源の活用を念頭に置きながら、誰もが参加できる仕組みや工夫により、住民の表現が様々な形で立ち現れることを期待しています。





「すべての県民がつくり手」 創造性に輝く地域社会の形成



加藤 種男 Kato Taneo

アーツカウンシルしずおか アーツカウンシル長（公益財団法人静岡県文化財団副理事長）

芸術文化は本来、お祭りに代表されるように、私たちの生活の中に根付いたものでした。自分たちの地域で、みんなでつくってみんなで楽しむお祭りは、すべての人がつくり手となります。そこでは、交流と包摂こそが重要であり、さらには他者との違いや混交を創造の源泉ととらえて楽しむものでした。

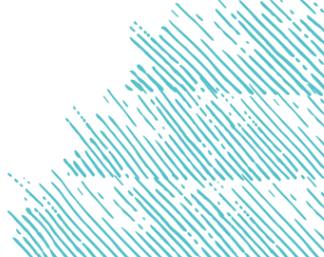
けれども、近代から現代にかけての芸術文化のあり様は、つくり手であるアーティストと受け手である鑑賞者を分離し、芸術文化が一部の人の特別なものであるという誤解を生みました。

近年、アートプロジェクトを通じ、芸術文化は社会とともにあることが再確認されるようになり、つくり手であるアーティストと、これまで鑑賞者であり受け手とされてきた人々との関係は、さまざまな形に広がってきました。

例えば地域の芸術祭では、アーティストと住民との共同作業によってアートプロジェクトとして成り立っています。それは地域社会の創造性を育み、生き方や社会の在り方について、新しい見方を示してくれます。それは、地域社会が持続していく力となるでしょう。また、すべての人が自己表現を社会化していくことで、少子高齢社会の課題解決に取り組むことができます。

さらに言えば、起業家精神を持った人々が、まだ誰の目にも見えていない社会の変化を顕在化させ、新しい価値を創造するアーティストの存在に注目しているのも、時代のニーズを先取りし常に進化し続けなければならない企業にとって、アーティストこそ最もふさわしいパートナーだと考えているからでしょう。

「アーツカウンシルしずおか」は、地域社会の創造的再生をはじめ、少子高齢社会における創造的な課題解決、移住者と地域を結ぶ取組、企業における創造活動やブランド化のサポートなど、まちづくりや観光、福祉、教育など社会の様々な分野の課題と芸術文化を結びつける活動を通じて、県民の皆さん全員をつくり手（表現者）とし、静岡県を全国一創造性に輝く県にしていこうと応援してまいります。



アーツカウンシルしずおか アーツカウンシル長 （公益財団法人静岡県文化財団副理事長）

加藤 種男 Kato Taneo

アートプロジェクトのネットワーク化を掲げ、企業、行政、公益団体などを横断して文化政策を推進。芸術文化を専門家の独占から解放し、コミュニティの再生と新たな社会創造への源泉ととらえ、個人の表現にとどまらない、市民主体のプロジェクト型の協働表現を、祝祭芸術と名付けて展開している。企業メセナを長らく担当し、あわせて、アートNPOの全国ネットワークの形成、横浜をはじめとする文化芸術創造都市の推進、東日本大震災の芸術文化による復興支援などにかかわってきた。京都造形芸術大学客員教授、東京都歴史文化財団エグゼクティブアドバイザーなどを歴任。著書『芸術文化の投資効果』『祝祭芸術』など。芸術選奨文部科学大臣賞受賞。



文化芸術と社会を結ぶ
アートマネジメントの専門家
プログラム・ディレクター
プログラム・コーディネーター

5人の専門スタッフが、助成制度を活用したアートプロジェクト実施団体の伴走支援を行うほか、ビジネスや行政などの分野においても、課題への創造的な対応を提案するなど、様々なご相談に応じています。



檜野 展正
Kushino Nobumasa

2000年より福祉施設で働きながら、広島県福山市にある鞆の津ミュージアムでキュレーターを担当。2016年、アウトサイダー・アート専門スペース「クシノテラス」開設のため独立。総務省主催「令和3年度ふるさとづくり大賞」にて総務大臣賞受賞。



北本 麻理
Kitamoto Mari

アートキャンプ白州でダンスと出会い、京都造形芸術大学舞台芸術研究センター、舞鶴市文化事業団、JCDN、ビッグ・アイ等の企画運営を通して、舞台芸術と社会の循環と関係性を考察。『三陸国際芸術祭(2015)』プログラム・ディレクター。



立石 沙織
Tateishi Saori

静岡文化芸術大学にてアートマネジメントを専攻後、ギャラリーやNPO等で、アーティストの支援やアートによるまちづくりに従事。展覧会やアートプロジェクト、アーティスト・イン・レジデンスの企画運営、広報を担当する。



鈴木 一郎太
Suzuki Ichirota

ロンドンでアーティストとして活動後、NPO法人クリエイティブサポートレッツで障害と社会をつなぐ事業に携わる。2013年の独立後は、主体者の思いから展望を見出す企画づくりを軸に、様々な分野の事業に関わる。Central St. Martin's College of Art and Design MA Fine Art 修了。



若菜 ひとみ
Wakana Hitomi

自治体職員として若手芸術家の支援やミュージアムの企画運営など文化振興業務に従事。フラッシュ・モブ・ハプニング主宰。コミュニティラジオの映画番組の立ち上げ、番組運営に携わる。2011年より社会人劇団の制作を担当。

なぜ、アートなのでしょう？

試行錯誤が不可欠であり、「人と違っているからこそ素晴らしい」というアートの価値観は、固定化した考えや状況を転換する可能性を秘めています。アーティストの視点によって気づきがあったり、新たな発想が生まれたり、アートは体験した人の内面に作用します。私たちが推進するアートプロジェクトは人の関わりを重視しており、その体験は誰もが持つ創造性を刺激します。それは地域の様々な場面において、住民主体でアップデートやイノベーションを起こす大切な要素です。